

出エジプト記24章12-16節
ペトロの手紙二1章16-21節
マタイによる福音書17章1-9節

本日の旧約聖書は、「主は、モーセに言われた。『山に登り、私のもとに来て、そこにいなさい。私は彼らに教えるために、律法と戒めを書き記した石の板をあなたに授ける。』」（出エ24:12）とあります通り、モーセが、主なる神様から教えと戒めを記した板を授けられるために、山に登る個所です。次に「そこで、モーセとその従者ヨシュアは立ち上がり、モーセは神の山に登った」（出エ24:14）とあり、モーセが、彼の後継者となる従者ヨシュアを重用していたことが描かれています。次に「モーセは長老たちに言った。『私たちがあなたがたのところに帰るまで、この場所で待ちなさい。ここに、アロンとフルがあなたがたと共にいる。訴えのある者は誰でも、彼らのところに行きなさい。』」（出エ24:14）とあり、ヨシュアがその長老たちに含まれて共に残されたのかどうかはわかりません。しかし「こうしてモーセが山に登ると、雲が山を覆った」（出エ24:15）、「モーセは四十日四十夜山にいた」（出エ24:18）とありますので、ヨシュアの記述はありましたが、山に登って四〇日を過ごしたのはモーセ一人であったのでしょう。

この重要な出来事の中に、ヨシュアの名前があるのは唐突といえます。また、ヨシュアの名前は出エジプト記でそれほど多く登場するわけではありません。しかし、すでに17章でその活躍が描かれており、本日の箇所よりもかなり後の方、出エジプト記の終わりの方の33章では、「主は、人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた。モーセが宿営に帰っても、その従者である若者、ヌンの子ヨシュアは天幕を離れなかった」と、この箇所と同じくらい重要な場面にも登場しています。本日の箇所を含め、それらの記述は、ヨシュアがのちの後継者であることを暗示する伏線のような記述といえます。本日の旧約日課の物語において、主人公であるのは明らかにモーセであり、彼は山に一人で登り、主なる神様に出会います。その役割から彼はイスラエルの民の代表であり、律法に基づく神との契約の代表者です。しかし、そのモーセの従者であり、立ち会っていたヨシュアも同じように重要人物である、そのような情報が示されていることは確かでしょう。

さて、そのヨシュアですが、その名前の意味は、「主（なる神様）は救い」という意味です。非常に重要な意味を持つ名前です。そして、わたしたちが信じるイエス様と同じ名前です。わたしたちの教会の習慣では、『聖書』の訳語もそうですが、通常の教会生活において、「イエス」と「ヨシュア」を表記上区別しています。それゆえ、同じ名前と認識することはあまりありません。それでは、最初の教会の人々は同であったのか、そう想像しますと、少し異なると思います。もし、最初の教会の人々がヘブライ語で『聖書（旧約）』を読み、イエス様についての新しい教えについてはギリシア語で考えると、明確に分けていたのであるとすると、現代のわたしたちと同じといえます。しかし、もし、『聖書（旧約、続編）』をギリシア語で読み、またイエス様のについてもギリシア語で考えるとなると、あるいは両方ヘブライ語となると、それら二人の

人物は、同じ名前の響きであったと思われます。わたしは、おそらくはそうであったと思っています。そして、だからこそ、イエス様の出来事についての表面的な誤解があり、その誤解が解けた時に、人間の思いを超えた深い意味が示されたのでしょう。

本日の福音書は、イエス様が弟子たちと共に山に登られ、その姿が変わったという物語の箇所です。そこでは律法の代表者であるモーセが現れます。さらに、エリヤも現れます。エリヤは預言者の一人ですが、その最後が天に昇ったというところから、イエス様の時代は再びエリヤが到来するという期待もありました。その意味でエリヤは預言者の代表です。読者が、ここにおける（ナザレの）イエス様と、モーセの後継者であるヨシュア（イエス）とを混同することはないと思いますが、『聖書（旧約）』を熟読していた人にとっては、なんともイスラエルの三傑のような方々が集まった象徴的な場面と受け止めるのは当然といえます。そして、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（マタイ 17：7）という主なる神様の言葉と思われる声が響きます。これらの描写は、『聖書（旧約）』に精通していればいるほど、一つのイメージを与えます。それはイスラエルにまことの救い主が現れたというイメージです。ただし、それは、モーセ（律法）とエリア（預言）の延長線上にあり、イスラエルを政治的あるいは軍事的に救う、かつて士師として戦いイスラエルを導いた偉大なる指導者と同じ名前の方の登場（再来）というイメージです。もちろん、それは誤解です。

福音書の物語は、弟子たちが目撃した事柄をはっきりできなかったこと語ります。マタイ福音書の場合は、マルコ福音書ほどではないといえますが、それでもおそらく三つの仮小屋を建てるという発言は、いろいろな意味で勘違いをしています。しかし、マタイ福音書の物語の流れとしては、ペトロはすでに天国の鍵を渡されており（マタイ 16：16）、彼を代表とする弟子たちは、イエス様の十字架の意味を理解しないため、逃げ去ってしまいますが、復活のイエス様に出会い、その本当の意味を理解して宣教へと遣わされる結末へと最終的に発展していきます。その意味では、本日の物語、そこにおける誤解は、今彼らがイエス様の使徒であることを改めて確認するための題材であった、言い換えれば、イエス様を信じるために彼らが乗り越えなければならない誤解であったということです。

本日の使徒書で「イエスが父なる神から讃れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、次のような声がかかりました。「これは私の愛する子、私の心に適う者。」（2ペト 1：17）とあり、明らかに福音書の記述、あるいは当時すでに有名であった伝承をもとに書かれています。ペトロの手紙の著者は、この出来事が「作り話ではない」と告げます。それは今日的な表現でいえば、フィクションではなく、ノンフィクション、ファクトである、あるいはこの出来事に目撃者がいることがエビデンスであるということになるのかもしれません。しかし、『聖書』全体が語る事柄は、そのような現代的・表面的理解を超えていきます。何かを事実と認識したとしても、誤解があり、目撃したとしても誤解があります。もちろん、事実ふりをした単なる捏造のお話など論外です。イエス様の出来事とは、それらを信じてしまう人間に対する赦しと贖いのための十字架と復活です。そのことを深く味わう期間を今週迎えます。今年も、ご一緒に恵み豊かな大斎節を迎えることを願っています。